

1 序

1-1 研究の背景・目的

都市計画分野で取り上げられて来たコミュニティ計画は、もともと古典的コミュニティ概念に対応した近隣計画論を起点とするものであった。近隣計画論は、その誕生以来、60年近い年月をへているが、住宅地の形成や生活空間の計画に重要な役割を果たしてきている。

しかし、この60年の間には都市を取り巻く社会経済構造や生活行動とコミュニティをめぐる状況は大きく変わってきており、必ずしも古典的コミュニティ概念における共通項であった“地域性”と“共同性”がそのまま期待概念として通用しなくなっている。それに応じて、近隣計画論を含めて、コミュニティに関する空間計画論も変質を迫られてきた面がある。特に最近では、人々の社会経済的生活行動の変化、まちづくりへの意識がたかまり、科学技術の発達による生活基盤の変化などによって、コミュニティのありかたも従来とは大きく違ったものが求められ、それらについて、社会学者や政治学者などの中には積極的に発言される人々がいる。

ここ十年位を振り返ってみると、高度成長期の産業第一主義政策の反省として、人間性の回復、住民主体のまちづくりへの志向性がたかまる一方、交通、通信といった科学技術の発達により、都市住民の生活圏は拡大し、また他人からの干渉を避け、個人的な生活を営みがちな都市社会が形成されつつある。こうした状況において、より快適な、より人間的な空間を創り出すために、現代においてコミュニティをどのようにとらえ、考えていけばいいのか、また、そのために物的な空間計画はどういった役割を果たすことができるのか、本研究では、こうしたコミュニティをめぐる理論及び実態と都市の空間計画との接点がどのようにあるのかを検討する。より具体的には、ひとつは現代都市社会においてコミュニティの捉え方の基準を見出すことであり、他のひとつは、そうしたコミュニティをとりまく状況のひとつとして物的都市計画がコミュニティの形成に果たすべき、あるいは果たしうる役割を模索することである。

なお、この研究のもうひとつの発端は、昭和50～51年度に当協会の調査研究でまとめられた「コミュニティの空間計画論」の補完がある。この研究がとりまとめられた時期はちょうど自治省のモデル・コミュニティの推進が模索された時期でそれに負うところが多かった。それから十年以上が経過して新しい状況が加わっている。これを問題にしたいと考えたのが本研究のもうひとつの動機なのである。なお、この研究作業は立石智昭君（筑波大学社会工学類、昭和62年卒業）が卒業論文の一環として行った作業を踏まえて、日端がとりまとめたものであり、この両名の共同作業である。

1-2 研究の方法

研究の方法としては以下の内容と手順で行った。

① 文献の収集と選択：現代コミュニティに関連する文献（＝学術的論文、あるいは著作）で一定の量と質を備えたもので理論的、実践的、物的の3つの視点から収集・選択し、資料集を作成。（付録A-2参照）

② 論点の抽出、キーワードの抽出：収集した文献から、現代社会の様相、これからのコミュニティ、空間計画という3つの視点から論点を抽出し、カード化した。なおそれぞれのカードに、その論点のキーワードをつける。（付録A-1参照）

③ キーワード・カードの分類：論点カードを、キーワードを基に内容的に分類し、グループをつくる。この作業で以下のグループが得られた。

- ・現代社会の現状
- ・現代都市住民の特徴
- ・現代コミュニティの地域性
- ・現代コミュニティのとりあげる共同性
- ・現代コミュニティとしてのネットワークの社会構造
- ・コミュニティ形成条件としての自主性
- ・コミュニティ形成条件としての共同性
- ・住民運動
- ・コミュニティ行政
- ・空間計画
- ・コミュニティの意義

④ 体系化：グルーピングしたカードを、グループごとに細分類し、グループの中で軸を設定し、それにキーワードをはりつけ、体系化する。（付録A-1参照）

以上のプロセスによって、現代コミュニティ論と空間計画（Physical Community Planning）の接点に関する新たなフレームワークの導出。

なお、本研究のような方法においては、各論稿の原著者の意図と筆者のそれに対する理解にギャップが生じていたり、あるいは誤解や短絡した解釈が生じている恐れがある。充分注意したつもりであるが、不注意や誤りに対してご叱正を頂ければ幸いである。